

国民の約8人に1人に相当する規模の医療ビッグデータ メディカル・データ・ビジョンが保有する大規模診療データベース 2016年8月末現在の実患者数が1,500万人を突破し1,557万人に

医療情報のネットワーク化を推進するメディカル・データ・ビジョン株式会社(本社:東京都千代田区 代表取締役社長:岩崎博之)は、当社が保有する大規模診療データベースについて、2016年8月末現在で、患者数が1,557万人となり、国民の約8人に1人に相当する規模(2016年7月末現在では9人に1人に相当)となりましたことをお知らせいたします。

当社の診療データベースは、病院から二次利用の許諾をいただき、かつ、匿名化処理がなされた、入院患者毎の診断名、治療方法、薬剤処方が分かる実臨床データ(※)で構成されています。

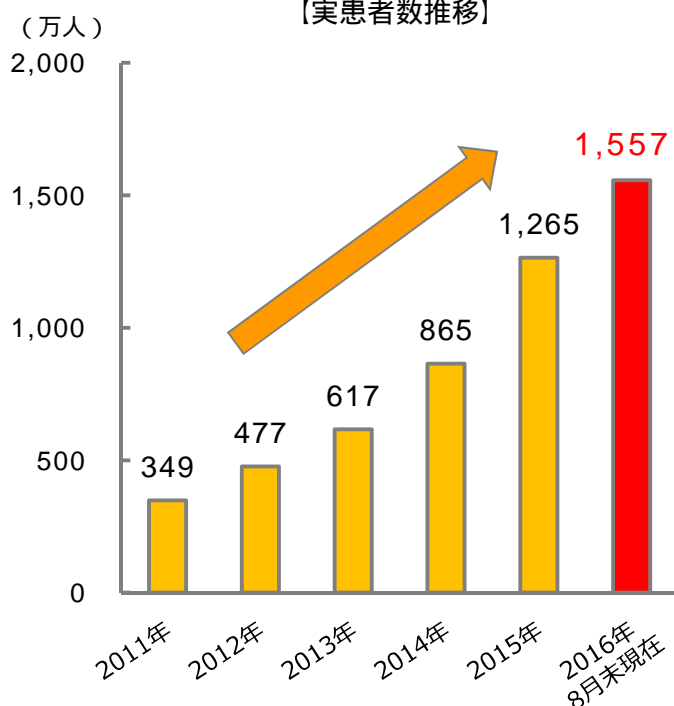
RWD(リアルワールドデータ)として実臨床データが重要性を高める中、特に当社のデータベースは、全保険種類を網羅した民間では最大規模を誇るものとして、製薬会社や研究機関で大きな注目を集めております。現在は、副作用の発生リスクや薬剤の効果検証などで活用されているほか、本年からはインシュアランス(保険)分野での活用も広がっております。

()当社が収集しているのはDPCデータを主とした入院と外来の診療データです。

DPCデータとは、DPC制度に参加している病院が厚生労働省に提出しているデータのことです。

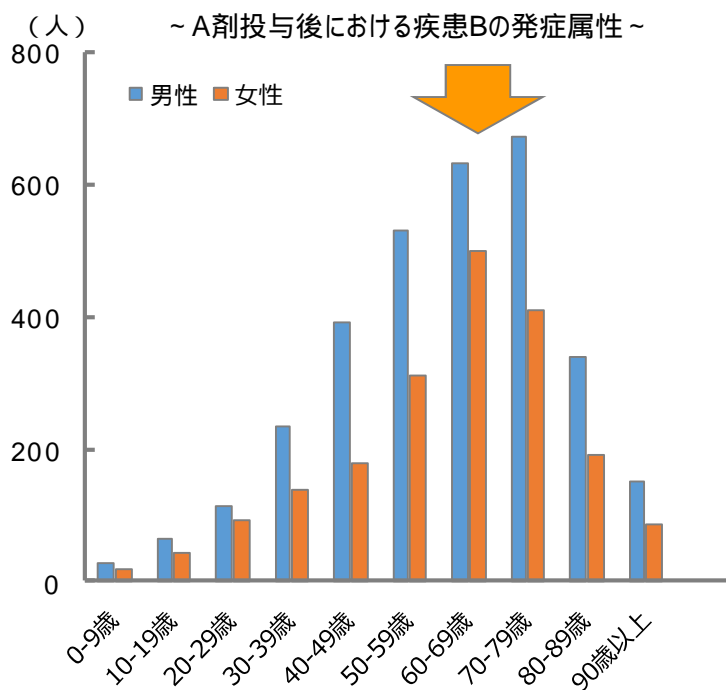
DPC制度とは、「診断病名」と「医療サービス」の組合せによる分類をもとに、1日当たりの包括診療部分の医療費を決める計算方式のことです。

【実患者数推移】



【当社のデータベースで分かること(具体事例)】

～ A剤投与後における疾患Bの発症属性～



A剤投与後、60～79歳の男性患者が特に多く疾患Bを発症しています。副作用発生の可能性が高いことが想定できます。